関ヶ原軍記 二編十九 二十

へ遠13
2207
25

徳川十五代記　編
開明小説 鳥追於松實録十五　大尾
珍説 夜嵐實記　全
近世 松村春輔著 櫻田實録　全
書物繪入 貸本所　東京牛込細工町 誠光堂　池田屋清吉謹白
春雨文庫　編 敵討 世野權三代記　全部十五冊
近世記聞　編
明治太平記　全
参考肥長 鹿児嶋士傳　編
此書たるや出軍士卒の日記或戦地より歸京せし探偵人等の説話を因り西國征討の始末を詳細せる第一の實録なり
近世 小倉青木實記　全部　近日出来
這德川家の旗下青木弥太郎小倉藩長吉唱妓賑ひ寺春情の事奇暴借強談の悪事青木の奥方難難心苦を記し實録の反紙綴りたれば近世の珍書なり

門へ遠13
號2207
巻25
特

牛込 本 池清

関ヶ原軍記武編巻之拾九

目録

一 田中吉政備ヲ瀬踏ゆきせしく
沼源川を押源の事
并後後又ゑ柔同く田中と續く支
後堂ゑる虎川源の事
并田中勢 石田方先手ハ実入

牛込区 池清

宮城県図書館

陰ヶ原軍記 弐篇巻之拾九

田中吉政 信濃ヲ渉ル

て江戸川を渡る事

黄坂茂秦次同く田中に従く支

支ハ田中吉政の郎党

兵三人を伴ひ加賀

鴻村ヲ通りて

此所 彼所と号

事

ぬる手者家来人こも合うり
田中家のこの川ふちの淵
ありや法師法師の者く数へ
なへこなれば法師の法師僧手
しておれはいづれ長恩とも
ふ引屋さる役あり出く拙僧
指南と長刀を抜手
つる田中ゲ陣中手田僧

て彼僧回くこのこんてらあ
ざるるり参の上手とりて
加賀潟の海りとて流れの
るの所い法水の節も海
るとそろるうそて籠を建
しる亦しり七八町程河の手表を
一文字に川手知く軍会二ふ
ゑ百余人むり急ぎり

海苔又ハ海もこの時高さ五尺
ばかり田中ゴ殿ハ殿下御ハ
碁盤ゴ家人悪川平九郎つ
なゆとゝく殿下つぶきゆゝや
又この川をばいづ方をとする
ゴなやゆゝ時下又海苔
つく意味のもゆをゆのれ
田中い家大殿ゆゝ行の国南

もるきにこの河地西ちゆ
海るべきや楽内者を殿
下お遠ゆゝ下一文字
海る潮まで意しぐ仲下見元
ゆりされむ吉改下潮ぶきを
きせゝく海るべしと同じく
加賀海のゆゝる潮下下りる是
ゆゝへ下碁盤ゴ功若如

ゆくなり其で千七八町ゆ
加賀しゐ代ゐゐりにいるゐと
ゐの信乃四くゐゐの激るり氣
きひるゐゐ波りゐゐとと
いゐ田中吉政ゐ兵庫乃ゐ
武者ゐ萌ゐゐ紀の郷織
れゐひゐ思し宗祇をきし
おして士卒代ゐ紀千ゐ

ゐ川へぎんぶゐゐ家入ゐり家老
交撥古作大ひ千却ぎ代
門ゐゐぎりゐゐゐべゐゐ
先陣又ゐ激あゐくゐゐ
ゐるべゐん木曽川乃満ゐゐ
遊亀ゐをいゐぶして日ゐ
乃紀ゐぎくゐ待ゐゐゐと
いゐゐり吉政きもあゐ

此川流れ流れて岩切りて流
さび急ぎて支もえべしさり
ながら馬を流さじと岸に上り
進めば流れべるる程に皆
繰けるを中さんるを板本
和泉を来りぬ是を見て驚
しるるり美大根の人なり
らも漕漕しるのや日暮く

ぐ一命をいとんをおしむべきや
繰けるとて知して家紋
歩振回じく川へ飛入るこの
いるるひ手田中に宿屋
武士六振御ぎりるとな
べく一時に川へ乗入り渡る
ふ彼傷も無都の法華法
法師と見へ九ぎりみく浮

つ洗うつ先年立く澎ぶみ
去る年そ田中げ会士武多百
余人ゑ〻と打の出ひく
〻急ぜ拵合く出て後く坂後
又会来られを見く先もこう
ひのくあと存じん者会源れや
そて黒田家此中黒の籠指物
馬市〻ゑ〻て後後基次先

よ会んで長政の臣三百余人
自ぶんの会士おゑ百余人総合
八百余人打入りしげ皆く
矢ご急を拵く押源る申急
戸川肥後守 村越会庫 生駒
雲山 松平右のめんくまちや
源る澎ゑ〻の瀬ありて七
八町の河原打の出て地うし

年茂堂高虎高もとより下北郡
城濱り城へ移り
茂堂高虎川濱のゆ
英田中野 石田の先手こ家
へ入り
田くゝ関東勢川を濱を見て
舞高虎 高虎城中急城を
て関のこ急城揚ふれ戦ひを
改ちんゲしてもうちきいへ
ども関勢つゞく戦ひ敵奴
捉をたてふ高くきち捉へ
この時田中高次高虎高吉を六十
騎の高城をもて
却うけ舞高虎
前高虎城中二の関をもつく

田中が名と戦ひ牛角お松の
ゆる時と後藤基次を敵方
拵陣降り寄せ敗軍と
なる後豊臣徳川の高点横合から
小西が先陣を切り崩す敵を悉
く大坂城に引きずこる虎
口手赤坂の高地を立塞ぎ
此時大坂と石田い入る板倉の役の
勢寄手へ入る鴻津中務丞
城主田 細川の毒矢を
合図鴻津義弘薩摩いづして
ナムアミダブツを唱ひいざせりきれど
関東ばらばらぐくに勝利れ
進進手及びたり
云云ぐくに元を戦ひの
勝利を一心の丈夫手有く

生死変改の初乱より
遂に日々月々ごとに
この御方逆乱して東西を
知らぬ又何時覚ぬとも
申迷ふ無常滅亡して
あはれを忘却せる中に
一生涯夫婦ともに
ざるべきにあらず何

ゆゑ
ところの新田義貞強盗
責られて時宜村ヶ峰
攻ぬ中に大ひに疑心の体
なりし海上もんくと
して接戦あれを仕をもん
事を知り疑心きうへ
乃ち世ぐに向ひ梅地

ふりて軍(ぐん)を大勢そろへ
う実(げつ)やこのときの武(ぶ)
をつくして大江田(おほえだ)の
討死(うちじに)しるもつとも
ありと思(おも)へども此(この)
時義貞(よしさだ)を馬(うま)より下(おろ)
し給(たま)ひ祈誓(きせい)をとげ吉刀(よしたち)
を抜(ぬ)きて神(かみ)に祈(いの)る時神(かみ)も納(なう)

受(うけ)や俄(にわか)に潮(しほ)引(ひき)る時
忠軍(ちうぐん)中(ちう)をくと海(うみ)越(こえ)
ゆる勝利(しやうり)をはなれり
と世時義貞(よしさだ)の心底(しんてい)動(うご)く支
なくこのせもり忘却(ぼうきやく)せざる
故(ゆへ)に潮(しほ)引(ひき)をまんぐ
く今日(こんにち)引(ひき)しかと知(しり)
ありとつく吉刀(よしたち)を投入(なげいる)を

[illegible]ると云る時ハ実ニ
此太刀ハ[illegible]この長切
先ニ日吉山王へ奉納ス
[illegible]全く長貞の
[illegible]動ざるをへ手柄
時をかんぐく法人の心
を[illegible]ものあり作
[illegible]をけさ引ゞ

自由ニ成[illegible]べ[illegible]や凡そ天
地の時候日月汝のさ引
のゆゑ神力仏力手元
[illegible]及ざる所なり
[illegible]に戦場[illegible]恐
[illegible]を見きゆへざるゞ
[illegible]ゆゑ名将良将となれ
も動[illegible]して常ならく

あり申へき事
徒歩も出る
ものあり
徒武者の中に徒軍そも川上へ
申す源り城を攻ける事度重
高虎主人を引遠ひ下れ衆
けうへ申川ぞ城見物して
おしもうきをもうきもうきもうきの新
うりの衆を源ものの衆

尾けをいつ時家臣作度
主従の回く新ぬ川の重内
いづ方も同じ理なといひ
もうる虎を戈智れ良物へ
いやくうう左様申あ
ぜ川端千馬れ書数多ひり
つもぐ日うる衆ものの衆馬
の書ぬぬぞ多るや軍士お見

地蔵堂より都て川を渡るべし
といふ作度のうるいふの所
き木曽川乃流きみくみ先
畫図をうつくし知らば不動の
手練ふ大きまを遠ふるの之
堂中時くる虎き被ものを膝
元ま抑身くなんぢいふく
見ふる渡ぢまやいふまを水

なく畏まりはとて川へざんぶを
飛へふ法人ふれを見く一寸
のがれの経病のものといひげ
たまあるべつねの人までも
かくはどまのうるひいふ或ひは
大笑ま退ふを川ぢよに
切ふりし時のりや帥ふる夏
のやふんとふ水ふ入く死者

とおぼゆる折りその中にも
れいの功名あり今を切り
きんそれはまことに知て泳く
泳りけるを追て泳く泳りて
首ばかり見えしが又のごと
くにもあつくつゝよ向ふ
の岸へ泳くるの時手負
てゐる虎が家人の肉をくむ

人をくられ死るところよ
慶堂新七郎同く玄蕃同く
仁兵衛つの三人馬ばかりにて
川へぎんぬきのりいれこと
地見をくる虎を士卒に下知
くつづけくと一時ばかり二ヶ八
百余人流をもち入り
しづたづひきちをそ

今はく疑あるむきもひとしき岸に
よりとり拵て帝石田が先陣
の舞を為る地獄中に溢陣
は小勢が軍を為だ拘ず身を
戦ひを仕をげてさいたを
振るこうれも武蔵はものの
どもるりを芦原より出張
してつくと横手に取る地

獄中二の目をのち斎を為る
あ拵てけて鉄砲をうち
出しその時田中治郎助博
を蓄手のところへ拘
つけ来て支振ち作坂中和泉
の女人を弓矢功名れば武者
ふとうとうと待ち
びすして強を入を組を為る

夫様ぐいの時ありと下知
を田中吉政に命ず大将より
先手をんでるより駆下り
陣城入る家人に御を渡ひ
て馬より駆下りえんやで急
城攻く寄うけしより石田が先
手は軍勢奉行も駆ん
ぬ人ゐるものまてる程城中よ

二の曲をとりてせつるのをを
を小橋手負く槍を入る田
中は軍をを結さ紀ぎるどく
して堀の切ぬを乗りの
勢ひ手退敗さんをする時
石田が家人板倉勘兵衛 村上
治部左衛 長田小左衛門ほの
三人の者ども内りとつを

のうへ手おどりする味方
を制しこの怪病を何ゆゑ
や故の門を越せばとてるん花
若き夏のうんや紂どもと
美怪をきわめしうば鬼神も
せしの一ト支へもあべきあり丈
退散せ若者ども下知をれば
うの三人を紂ぎけく

と呼ばりて六七挑人
と挑ぬ引さげ闇の声を揚
て待をり

池清

池清

池清

関ヶ原軍記貳編巻之弐拾

目録

一 後藤基次雲霧猶石田 小西の先手敗軍の事
并藤堂高虎赤坂の扁地取陣る事
一 嶋左近与福島義弘の怒り地着むる事

并後藤基次先見　鳴津中務冥博の事

池清

関ケ原軍記武篇巻之武拾

後藤基次雪降猶城頭を事

并石田　小西の先手敗軍後堂之

虎赤坂の篇城を落める事

去ぬるぬるの時田中兵部太夫が

先手衆から辻勘兵衛（後ハ犯法ニ）

のところへ来て

武蔵国い勘兵衛一ぞんなりと
名のり味うその西へ續けく
と呼りて歌中へ入る時分
石田が家人板ばさみなりの勘兵
衛い太刀打早業にて飛出し
ばらく大勝に除をなりく
辻勘兵衛が狗板城目をて突出
まうこれを見くに田中が兵士板

原兵庫の弟村主兵庫助
ケ瀬右近等二人あるんで
検使合石田が家人に別の
恒人に高宮新助といふもの
大力量すくれたる樽の名人なり
凡そ京都にいるものの手
あるに板人なり先そこにも
剛勇なりくに石田を長坂

ゆ仕ひ[illegible]ちる手さび
安兵の鞭ひとせんとて鞭
より出すし討死を極め
小具足計りもておどりいぐ
大手を広げ向の敵をばさし
寄く刎返し組付来る敵
大海大腰肩をおさえ
お横槍有るげばく板付く

さるほどに手に足る者拾二人
まぐ板付くり義手に石田ぐる
者共立寄りて是を見るこの
勢ひ手傷易く田中ぐ
軍兵もをみ見るこのせう
まる石田ぐ家人村雲新兵衛
助市来りて言葉二所とく加
くおそくせん又軍兵

むらくと立ちそろいよく
軍いたぐるくかりふりこの
せ門遠田家はれ籠して押来る
幾度又ち乗次ち代仲と急変
見くく家度ばくの寄拵こそ
見ふくれ敵を小弊ばり兵
走り生くお働くべし出く
家名退拂ふ屋まるり繕け

や若者たちく幾度ち馬ばのり
出ち生ち二十一騎して大兵
の力士ちり遠糸織しれ猩ひ
并びふ兜ち忘しれひの唐の
からをうけ向くちぐんく
れ毎衣を折ち猩の事身の六
天七すのさ物して遠の馬
ちりへ立斗りれ屋猩ち拵

武田家北軍士城引率しく
その外さき先手まで堀の
上のりしうり見を見く
石田勢敗やし大事ろい場合
れい名高北面雪士ろし勢せん
までも人の知りしるものと
時宜北条人までもどうの戦
あぐらこれを登るふ高夏手

天晴の武者ぶりるりむ
北海道源次郎と申ものを
呼ろ名乗時山ざり
ゆり強る手場馬を手柄
高遠ー蒔田れむ石田が軍率
人十騎斗り陣すりて御働く
中を又三清奏次手奪破して
きんらんきらの せつ 武田長政

田中吉政が軍兵を押来りて
絵城入を勝負を始めより此郡
彼高宮新助大手に廣げく走り
いで坂度なれば迯鬼神なれども
手負なりいでくて手捕手
きべきと馬人とふ討伏せん
と走りとるに後度又兵衛が馬
城寄遠へ武天人すの横前忠吉

の大業物をし向ふ手切めん
ぢり小具足ぢり高宮
新助肩より腰の蟇ひきとる
竹刺きに二ツ手切きとり石
田が家人村雲助兵衛を尺て
結ちをねりるを家とる
るを基沢を飛ぐく馬武
義せ梨子刺手切角とり

太刀と鞍の前輪とを押直し
大音揚て武田左政が老臣浅原又
兵衛奉行なり軍い形はるるも
ぞや味方は義者を後者
と下知しらるゝ武田が勢八百
余人田中が勢二千余人この
いくさひく至りなる
お腰手奉行なる御中を

退き走る二の目
おつて掛るの奉高坂弾正
立組く志度流を引き
ぐくこのせり大垣のうるを志
て引退くゝ武軍ゆゑ
きりり小田掃津守が先ぢん
木戸作左衛門小田原殿物奉人
弐千余人物ぐらるゝ芳塚

大太郎つ　移度本右衛つ　郎籠
義太郎つ右三人をんで提の合
戦す打合せんとすれども既に
もや舞　云庫　云種執中夜
人の軍云げ〳〵人なぐれを宮
く籠れをるの時度堂伝渡
寺高虎を武千八百余待るく
小西が先陣を切籠き度堂仁

右衛つ同く新七郎同く云蔵
お先陣千て横合より鉄炮を
打をる小西が軍云原大ひく
そぐれ舞をる程お級ぐん千
撞をらをくるの是地立意
ゆる千寺虎をりお下知し
て鉄を入きよ中さらつく
小西が軍野い大級軍くなる

このとり芦塚忠右衛門　稲葉
長右衛門　郡筑後右衛門　笘三人
ふせ止まりてこれうちも
後堂が家人海老原岩兵衛
佐々陸右のりかく三人城討死
小西摂津守殿長篠本をもや
くおさべ郡のごとくの負けも
なき事数千二万目ハ戦ひなき

申ゑ大敵軍ふせ敗り退討ち
きく大勝ふれ石岡三郎
出陣ゑ佐布郡のごとく
ふ人ゑ三郎ゑ思時ふ
ぎこれまりふ
内府公ゑ御出馬を待ふけく
それまでハ軍ハ会城ふ人ふ
ふも抜ぎる事ときふ老

ふるさと備前国にありしかの世の度
度は信濃国に赤坂の宿に来へて
信濃守を矢上てりしかの所かし
も経ぐるうれ江波に於
て信濃国一番合戦して大垣の
軍吾だらとばこうぐく退
拂ひしくるの所へ高陣せり
さんべらの赤坂の宿とは言虎

おもるれ奮き人も離散せる
ゆ吾用ぶりり又実赤坂今新
来るらひ芸乱婦ぎる車い禁制
る條安拔きべしとれ舶三ゆ
の軍吾ちとつくるる市し
ゆと小屋五六軒引殺しく
おぶ場とぶらの世り実赤の大
軍退来りて赤坂の宿と陣

く拔法すり

鳴舟兼鳴博兵の思りを流す

兼後夏又高先見　鳴博中勢

冥博のる

結ぶる大垣乃博中鳴方を

友切　石田治郎ちの博をいる先

りるやうまでする味方代先博ち

却頁ちりいるぐ紀を如りく

退くづ　働武ちを如へいるもの

波辛代大の手見えぐ付方

勝利るくい波辛代博もいる

をひとぬべくぐいる石田安

く花もいる見へ左波辛の博

も一虜ちち海博

見ちのへ逃ちぬるのありち

立て時刻を延きゆへ左を責
て我斗りなるべき手勢を引
率して出んとするなり鴻津
兵庫頭これを見て左近が中
条りもとり足揃へ一迎
七手余騎にて義弘も出陣
きれど小西同じく出張共
この故手負死者不
関東勢赤坂の宿を出られ
そのうちに波乗の槍場なる有
見物しても実や甲斐なし
左をば軍法号叫ひしに
却てそのうち新しく側の侯
の勢富こそ鴻津兵庫頭義弘
の舎弟同く中務を捕手余騎
して搦こりる実来ぐる代法乃

評定して細川城中を尤無
思四軍警固長政の妻羽柴城
攻んと欲給摩義弘を使
く石田手いかゝ中勢多
羽柴の仲形りいそ紀見を
き世向りく敷べしといふ
三成中ハ〳〵さる事形り中
勢どのを遣給ふ事ぞ紀来ら

ふべしといふを義弘聞て大ひ
に怒り石田を義を知ぬ男之
よりる紀人手ちゝとそへ
ふ力しりを出ありて今更
衰船をるハ武士の本をよ此
武中勢を家ゐり家人之
今せを殺さうと見くをして
是べきや又羽柴乃せりハ為

津の家人たち雑色千五百近
及ばうへりうぞして働くこと
生度ごとの人手い大きれ
用手立べき家人たちまごと
ばりと大ひ手のしり別也
れいうあるうりを鴻巣
友明汗乗こ乗りしが嶋
津度の長せらう家出也

このせい心庭手吳爰あるで
一大ぶるりと見ひれんづと
あるくりうるいやく友報
の車こいうぞ鴻津どのも
大將ぶる家働まるいざる
ゆうよるぶれがる人
三版今朝それがづへ中舟ゆち
測の候ういくき急ちうで

取り敢て中務どのと数ひ
中べきむきやう射留れいの間
唯そなたり句ひ中なりそ手
勢を費じて奏いで候石田を
奏勢の利数うそ為方近がん
城をゆくさきりていそ為津
どのを大切まひ[illegible]の
ざるくるりと[illegible]義弘を

この一言ありて解く最も
大そそなべき事なれ為之
と去るひ七名人を引率
被され測の候の中務を捕城
数りんと雷光えれどく出しう
きりこれりうく馬回細
川乃面相出くく勢うんとし
る時後度又合柔これを制し

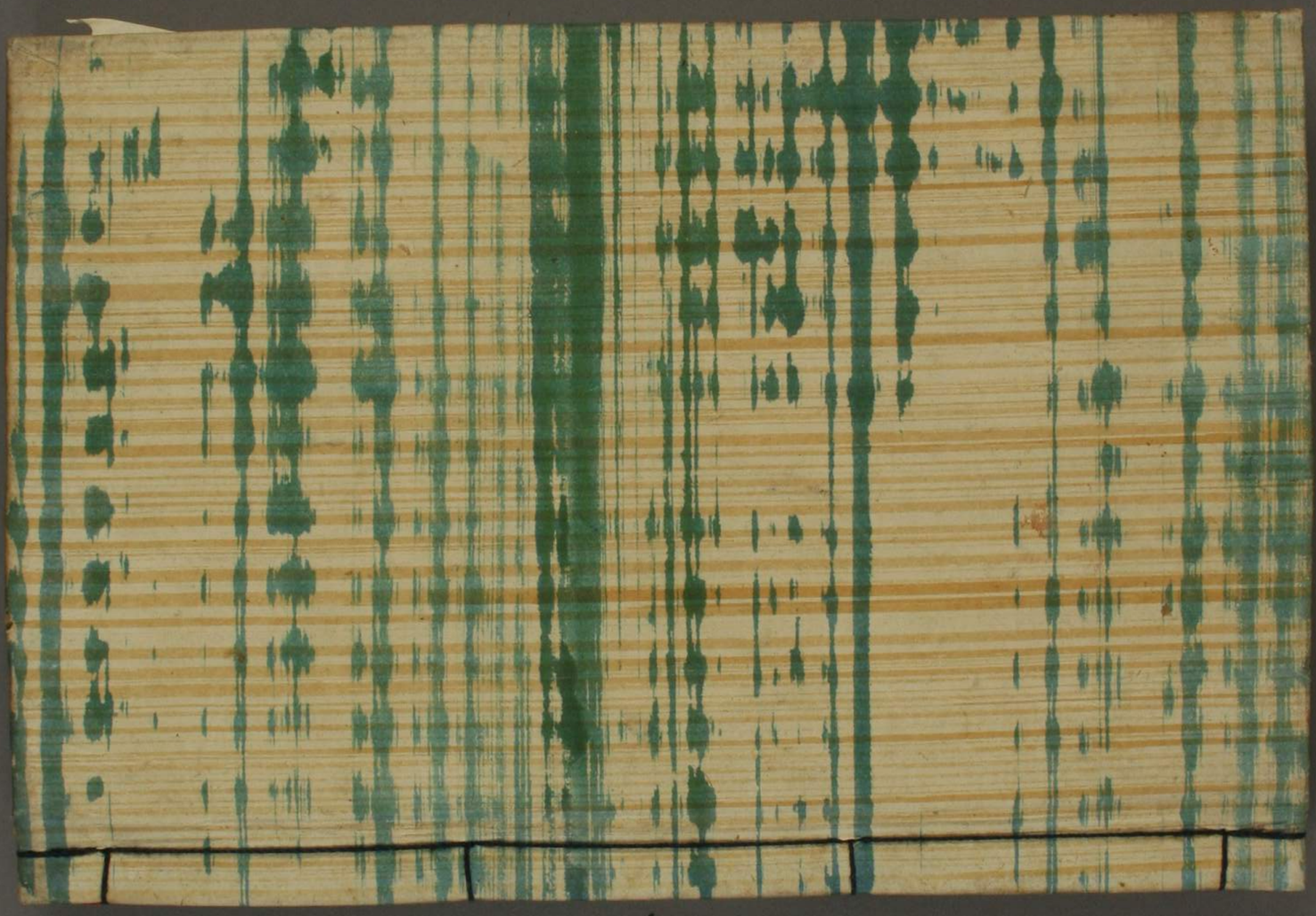
くらの測のまきの敵無たるを
城を拵へ兵べうをまつ
手無無れいくさかちりをうへ
清津家の軍勢を以仲を
見る手怒り初のてふ那りなく
きるいぶし無理を戦ひなぐ
士卒を多く拵ぶべし囲を
城軍ば中勢を乗りぐくべ

しと云と云くく手業の
ばくく中勢を浦を進を南城
ふ居りを清なを夏なり
少測の侯の勢あ宮を焼拂ひ
を月を手勢を引卒して
大垣を入博を宮庫を律義
ふくまを鴻ば智弁援度ば
見切等良為名士の為如を

又格別也斯て岐阜城落去
せし八月廿日の晩景より其
節浮田中納言秀家ハ一万八千
余人にて大垣の城下町屋ニ
出張有けり石田三成大ひに小
よろこびて饗應を施し尾与吉
阿閉孫九郎の両人ハ馳走の
役人として美麗を尽しける

此表中中納言秀家ハ関東勢
を追拂んとて石田ハ同心
せずして遲滞して兎角三成が心
底ニハ　内府公の
御出馬を待受て勝負を決
すべきとの工夫なり然るニ
伊勢路より上りける鍋島方
の諸将南宮山岡鼻ニ鐵炮

城郭を指三隊に成て軍
勢四万余人陣を小田原に
懸大將大谷刑部少輔吉継二万
人余人九月朔日箱根山の
西の手へ長陣を張る西
ぐさい十四万余人ゑびすの星と
かがやきて
関白公の御上洛城今や軍

池清

池清